

桜美林大学のフィールド教育

— 「学而事人」の教育実践 —

基盤教育院 フィールド教育部門長
足立 匡行

1. はじめに

多様化する現代社会において大学が果たすべき役割とは何か。人類学者 Mary Douglas は 1973 年の著書 *Rules and Meanings: the Anthropology of Everyday Knowledge* で「境界は社会生活を規定する」と述べている。しかしグローバル化¹⁾と IT 技術の急速な発展は、様々な境界をぼやけたものとした。現代社会に生きる人々の多くは、境界にとらわれず移動し、時間や空間に縛られないコミュニケーションも可能となった。だが人々の移動とヴァーチャル世界でのコミュニケーションの増加は、異文化に暮らす人々の間に相互理解をもたらすのに十分な貢献をしているとはいえない。このような状況を考慮すると、グローバル化する社会で大学が果たすべき役割のひとつは「共生」に焦点をあてた教育といえるだろう²⁾。

桜美林大学基盤教育院フィールド教育部門では、学生が大学内の教室や図書館という閉じた空間にとらわれず、キャンパスの外で活動することで自らがその体験から学び、個々の「人間力」³⁾を高める教育を実践している。学生たちはキャンパスから地域社会や海外に出ることで、異なる人々、文化、言語と出会う。これらの新たな出会いは人々をつなげ、相互理解と共生について考える第一歩となっている。

このフィールド教育での学びは、本学の建学の精神である「キリスト教主義に基づく豊かな教養をもった国際人の育成」と「がくじしじん学而事人」(学びて人に仕える)の教育目標にもつながる。つまりフィールド教育は、グローバル化する世界の中で、共生を可能とする知識と行動力を身につける実践の場となっているのだ。本稿では、紙面の制限上、まず現在の桜美林大学基盤教育院フィールド教育部門のプログラムの全体像を概観し、さらに本部門の目指す教育と将来像について論じていくこととする。

2. フィールド教育プログラムの現在

フィールド教育プログラムは、2006年に基盤教育院の前身である基盤教育センターにおいて、文化人類学者、高橋順一教授の指揮下で始まった。2010年現在のプログラムは、「語学研修」、「国際協力研修」、「海外企業研修」、「国際理解教育」、「地域社会参加」の5区分に分けられ、国内外で計25のプログラムを展開している（表1参照）。ここではまず(1)～(4)の海外プログラムを紹介し、その後、国内で実施されている(5)「地域社会参加」の概要⁴⁾について述べていく。

表1

(1) 語学研修	(3) 海外企業研修
アメリカ夏期セミナー	中国企業研修プログラム（北京・上海）
カナダ夏期セミナー	US企業インターンシップ
オーストラリア春期セミナー	(4) 国際理解教育
ニュージーランド春期セミナー	NIDA・オーストラリア演劇研修
イギリス春期セミナー	海外協働学習体験—韓国
韓国夏期セミナー	パリ春・夏期フランス語研修
中国春・夏期セミナー	スペイン春期セミナー
カナダ春期セミナー	(5) 地域社会参加
(2) 国際協力研修	地域学校パートナーシップ
フィリピン国際協力	異文化理解教育リーダー研修
インド国際協力研修	国際理解訪問授業
バングラデシュ国際協力研修	不登校生学習支援
ベトナム総合研修	バイリンガル地域研究
カンボジア国際協力研修	多文化共生支援

2.1 海外のフィールド

日本語を母語としない人々とコミュニケーションをとり相互理解を深めるためには、「外国語」の学習が必須となる。その語学の習得を主な目的とした研修が「語学研修」である。(1)の「語学研修プログラム」では、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、韓国、中国の7カ国で、英語・中国語・コリア語の3言語を学習する機会が提供されている。英語は「世界の共通語」として、中国語は桜美林学園の創立者清水安三が1921年北京で崇貞学園を創設して以来、本学ではなくてはならない外国語のひとつとなっている。

「語学教育」に加えて、現地の人々と共に特定の課題に取り組み、対面でのコミュニケーションをとる重要性を理解してもらうために、(2)の「国際協力研修プログラム」が設置された。このプログラムは、「環境」、「紛争・平和・開発」、「ジェンダー」等をテーマに、

海外の大学や提携機関と協力しながら、インド、バングラデシュ、フィリピン、ベトナムで研修を行うことで、「地球市民」としての知識、態度、行動力を養うことを目的としている。例えば、フィリピン研修では、マニラのスラム街やゴミ山などに行き貧困問題について学習する機会が与えられている。

国際協力に加えて、ビジネスの世界でも「外の世界」との交流はなくてはならないものとなっている。このビジネス界での経験を提供しているのが(3)の「海外企業研修プログラム」である。2009年度の参加者たちは、米国ではロサンゼルス空港、日系福祉施設、旅行会社、日系商社などで研修を行った。また中国では語学研修と共に中国現地企業に関する知識向上を図るプログラムが用意されている。

(4)の「国際理解教育プログラム」は、「語学」、「企業研修」、「国際協力」とは異なる側面をもったプログラムだ。このプログラムでは、National Institute of Dramatic Art（オーストラリア）で演劇について学んだり、^{ヘンソ}韓端大学（韓国）で日本学科の学生たちと日本語で「協働学習」をすることができる。またアルカラ大学（スペイン）とパリ・カトリック大学（フランス）では、語学と文化を中心とした研修が行われている。

コミュニケーションの基礎となる語学研修、外国語を実際に使用して現地の人々と課題に取り組む国際協力、ビジネス社会で「共生」を考える企業研修、そして演劇や海外で日本語を通しての相互理解を深めることを目的とする国際理解教育プログラムという海外研修の4区分は、基盤教育院における国際人育成のための礎となっている。

2.2 国内のフィールド

上記の4つのプログラムに参加して海外に出る経験は、大変貴重なものであるということ否定する人はいないだろう。日本で生まれ育った若者たちが海外に出て、現地の人々との交流を通して自分自身（自文化）への理解を深め、他者との共生を実現していく体験は必要不可欠なものだ。しかし「異文化」は私たちのすぐ身近にあるということも忘れてはならない。日本国内においても様々な文化背景をもつ人が暮らし、同じ日本で生まれ育った人でも、考え方、生き方は千差万別なのだ。地域参加プログラムは、この「国内の多様性」を理解し地域に貢献することで、学生が地域住民と共に様々な取り組みを行うプログラムである。

「地域社会参加プログラム」は、①地域学校パートナーシップ、②不登校小・中学生学習支援、③異文化理解教育リーダー研修、④国際理解訪問授業、⑤バイリンガル地域研究、⑥多文化共生支援の6つで構成されている。

①の地域学校パートナーシップは、近隣の小学校がパートナーとなり、相互の教育を支援しあうことを目的として発足した。現在は2つのパートナーシップ・プログラムが実施されている。一つは、大学生が町田市内の小学校で児童の学習サポート（授業中のアシス

タント)や遠足等の学校生活支援を行うプログラムだ(パートナー校は、山崎小学校、忠生第一小学校、函師小学校、町田第一小学校の4校)。二つ目は多摩市第四小学校での英語活動支援である。この授業では受け入れ先の児童・教職員、他の受講生たちとの密な交流が必要となるため、英語力と同時に対話力や協調性を高めることも可能となっている。

地域学校パートナーシップと異なる形で地域の児童・生徒を支援しているのが②の不登校学習支援である。この授業は町田市の教育委員会と提携して実施されており、参加学生は自己学習支援システム(eラーニング)を運用して、各自が担当する10~20名の不登校児童・生徒の自宅学習支援を行う。2008年からは「ふれあいの日」を設けるなどして対面での支援にも取り組んでいる。学生たちは、これらのプログラムを通して児童・生徒の多様性への認識を深めている。

将来を見据え異文化理解教育の指導者育成を目的としたプログラムが、③の異文化理解教育リーダー研修である。このプログラムは「桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト」⁵⁾と連携し町田・相模原を中心とした地域での国際理解教育支援活動をしている。昨年度は「さがみはら交流ラウンジ」が企画する「さがみはら国際交流フェスティバル」に参加したり、武蔵野市の「世界を知る会ジュニア」で、民族服や楽器などを用いて異文化を小学生に体験させる活動を行った。

④の国際理解訪問授業は、受講者の大部分が桜美林大学の留学生となっている点で、上記のプログラムと異なる。学生たちは、地域の小・中・高校などの要請に応じて、学校や公民館を訪問し国際理解活動を行う。例えば、モンゴルからの留学生が自国の写真、遊び道具、民族服、調理器具などを用いて、母国の紹介をしたり、児童・生徒の質問に答えたりする。本学にはアジアからの留学生が多く在籍するため、どちらかといえば「西洋」に偏りがちな国際理解を是正するのに役立っているのではないか。

近隣の学校等を通してではなく、近隣の社会と直接接し、自分が住んでいる地域について学ぶのが⑤のバイリンガル地域研究である。このプログラムの特徴は日本語と英語を用いて留学生と日本人学生が協力し合いながら学びの体験を共有することにある。参加者は、各自で選んだテーマやトピックに沿って、町田・相模原周辺での聞き書き、コミュニティ・イベント参加といったフィールド活動を行う。またクラス単位の活動としては、地域でユニークな活動を続ける人をゲスト・レクチャーとして招いたり、町田の歴史と自然を学ぶ「里山ウォーク」などを行っている。

国内のフィールドには「日本語」を用いて地域の外国人住民支援を行うものもある。⑥の多文化共生支援は、相模原市の国際交流ラウンジ「てにをはの会」の日本語教室と、横浜市泉区・大和市に位置する「いちょう団地」で活動する「多文化まちづくり工房⁶⁾」の日本語教室で、日本語を母語としない人々に日本語学習支援を行っている。学生たちは日本に暮らす「外国人」と直接コミュニケーションをとることで国内の国際化を肌で感じる

ことになる。

ここで述べた6プログラムを通して学生たちは、国内での多様性を（再）認識し、活動を通して相互理解の難しさや楽しさを体験することになる。どのフィールド科目でも受講期間は一学期間となっているが、さらに一学期間、自主研究として活動を続けることもできる。活動を通してコミュニティの一員として受け入れられ、社会との結び付きの重要性に気づくことで、授業終了後もボランティアという形で活動に携わっている学生も少なくない。海外体験は貴重だが、自分の属する地域を理解することも「国際人」としての必要条件といえるだろう。

3. フィールド教育の将来と課題

フィールド教育の目的のひとつは、共生を可能とするための第一歩として、国内外で様々な出会いを提供することにあることはすでに述べた。今後フィールド教育では、人と人をつなげることはもちろん、既成の学問領域を超えた形で、大学内での授業をより一層意味のある形で結び付けることが必要になるだろう。例えば、本学で学べる17の外国語をフィールド教育プログラムと結びつけ、両方をセットにして受講できるようなシステムを構築したり、休暇期間を利用した海外研修のための短期集中語学講座を設置したりすることが考えられる。またフィールドと宗教教育を結び付け、フィールド先となる土地の宗教などに関して基礎的な知識を事前に深めるということも可能だろう。

更には、すでに「バイリンガル地域研究」で行われているように、地域でユニークな活動続ける人をゲスト・レクチャーとして招聘したり、インターネットを介して国内外の人権・環境活動家、作家、海外指導者を授業に招き入れることで、「世界」を教室に持ち込むこともできるだろう。またJICA等の学外からの客員教員を交え、実践者、研究者、教育者がひとつのチームとなりフィールド教育科目を担当することで、今までにはない新たな知の体系を構築することが可能となるのではないか。既成の枠組みにとらわれない学習活動を通して、さまざまな要素が結びついたとき、桜美林大学での共生教育の更なる第一歩が始まるはずである。

4. おわりに

グローバル化による人々の移動、IT技術革新による時空間に縛られないコミュニケーションは、今後ますます加速することになるだろう。このような社会の変化に対応し、本

学の建学の精神である「キリスト教主義に基づく豊かな教養をもった国際人の育成」と「学而事人」の考えを実践するためには、講義中心の教育からフィールドを取り込んだ教育への転換が必要となる。なぜなら学生たちは学外を学びの場とすることで「異なる人々・言語・思考」と出会い、教室のみでは得ることのできない体験や知識を人々と共有できるからである。

学生たちには、自分たちの体験を振り返り、次の学びにつなげるという「省察的实践」⁷⁾が要求されるのみではなく、より大きな枠組み「全体論的視点」⁸⁾の中で自分たちの活動を捉える能力も必要となる。個々の「人間力」を高め、「共生」に焦点を当てた教育の実践は、本学で教育を受けた学生たちが近い将来国際人として世界に貢献するための基礎となるはずだ。

注：

- 1) グローバリゼーションは、“… increased economic, cultural, environmental, and social interdependencies and new transnational financial and political formations arising out to the mobility of capital, labor and information, with both homogenizing and differentiating tendencies.”と定義できる (Jill Blackmore, 2000: 133)。
- 2) ここでの「共生」という概念は、UNESCOの「21世紀の教育」レポートで述べられている“Four Pillars of Education”の“Learning to live together”と同じ意味合いを持つ。
<http://unesco.org/delors/foupil.htm> (2010年10月4日閲覧) 参照。
- 3) 「人間力」とはコミュニケーション力、異文化理解力、自己マネージメント能力等を指す。
- 4) 「地域社会参加プログラム」の説明は、事前説明会 [2010年9月9日, 10日, 13日]、シラバスおよびプログラム担当者からの情報をもとにしている。
- 5) 「草の根国際理解教育支援プロジェクト」は1997年に創設された地域貢献のための教育プロジェクト団体。地域の人々と協力して多文化共生のための活動を推進している。世界中から集めた民族服、玩具、楽器などを国際理解教育のための教材として貸し出しも行っている。桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトホームページ
(<http://www2.obirin.ac.jp/~kusanone/kusanone.html>, 2010年10月4日閲覧) 参照。
- 6) 「多文化まちづくり工房」ホームページ
(<http://tmkobo.com/modules/d3blog/>, 2010年10月4日閲覧) 参照。
- 7) ショーン, ドナルド (2007) 『省察的实践とは何か —プロフェッショナルの行為と思考—』 参照。
- 8) ピーコック, J.L. (1986) 『人類学とは何か』 参照。

参考文献：

- Blackmore, J. (2000). 'Globalization: A Useful Concept for Feminists Rethinking Theory and Strategies in Education?' in Burbles, N. C. & Torres, C. A. (eds.), *Globalization and Education: Critical Perspectives*. New York: Routledge.
- Douglas, M. (1973). *Rules and Meanings: the Anthropology of Everyday Knowledge*. New York: Penguin Books.

- ピーコック, J. L. (1986). 『人類学とは何か』 (今福龍太訳) 岩波書店.
- ション, ドナルド (2007). 『省察的实践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』
(柳沢昌一・三輪健二監訳) 鳳書房.

参考資料：

- 『地域社会参加 履修の手引き 2009-2010』 基盤教育院フィールドスタディーズ.
- 『桜美林大学 留学と国際交流 2010-2011』 桜美林大学 国際交流センター.
- 『利用のてびき』 桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト.